



みどころ

かつて東宝が「8.15 シリーズ」として世に送り出した『日本のいちばん長い日』(67 年)、『連合艦隊司令長官 山本五十六』(68 年)、『日本海大海戦』(69 年)等の戦争大作は、今なお名作として輝き続けている。

しかして、戦後 80 年を迎えた 2025 年の 8/15 は、TV では『シミュレーション〜昭和 16 年夏の敗戦〜』前編・後編が放送され、映画では本作が公開！私には、『沈黙の艦隊 北極海大作戦』と共に「こりゃ必見！」だが、さて・・・。

駆逐艦「雪風」は 1945 年 5/7 の天一号作戦で“連合艦隊”が消滅してしまった後も生還した“幸運艦”だが、その働きは如何に？チラシに躍る「多くの仲間を救い続けた、『雪風』の史実に基づく物語。」「戦うこと、それは、生きること。」の見出しからして、私は違和感があったが、それをそのままスクリーン上に投影したキレイゴト(?)にはいささかうんざり！さらに、前半のストーリーを牽引する先任伍長の“いい人”ぶりにも、ストーリー全体で存在感を見せ続ける寺澤艦長の“いい人”ぶりにも、製作委員会方式の弊害が顕著！？

2022 年 2/22 に始まったロシアによるウクライナ侵攻を持ち出すまでもなく、「台湾有事」はすぐそこの近未来なのでは？そんな状況下、「戦うこと。それは、生きること。」とキレイゴトを並べ、「多くの仲間を救い続けた、『雪風』の史実に基づく物語。」に感動していて、本当に大丈夫なの？

■□■2025年8/15、TVでは『シミュレーション』、映画では『雪風』■□■

私は、来る 8/31 (日) には大阪のシネ・ヌーヴォが開催している「戦後 80 年記念 決定版！日本の戦争映画史」で、『日本海大海戦』(69 年)を観に行く予定。同作品は『日本のいちばん長い日』(67 年)を第 1 作として、東宝が始めた「8.15 シリーズ」の第 3 作だ。

第1作はもとより、第2作の『連合艦隊司令長官 山本五十六』(68年)も素晴らしい映画だった。近時の邦画界には、8/15の終戦記念日を迎えるにあたって記念すべき戦争映画大作を製作・公開する力量はなくなってしまったが、それでも7/25には『木の上の軍隊』が公開された。

また、TVではNHKスペシャル終戦80年ドラマ『シミュレーション〜昭和16年夏の敗戦〜』前編・後編が、8/16、17に2夜連続で放送された。これは猪瀬直樹のロングセラー・ノンフィクション『昭和16年夏の敗戦』を原案に創作を加えたドラマと、総力戦研究所の史実を伝えるドキュメンタリーで構成されたものだが、そのキモは、「日米開戦前夜の1941年夏、首相直属の総力戦研究所で日本とアメリカが戦った場合のあらゆる可能性がシミュレートされた。官僚、軍人、民間から選抜された若きエリートたちが導き出した結論は日本の“圧倒的な敗北”だった・・・」という点だ。しかして、その反響は・・・？

そんな時代状況下、2025年8/15には、なんと東宝が『雪風 YUKIKAZE』を公開するとの情報を得て、ビックリ。小学校時代から軍事雑誌「丸」を読んでいた私は、「戦艦大和」だけでなく、「幸運艦」と呼ばれた日本海軍の駆逐艦「雪風」のことをよく知っていた。ちなみに、1964年には「雪風」をテーマにした映画『駆逐艦雪風』が公開されたそうだが、残念ながら私はそれは観ていない。

駆逐艦「雪風」は1941年12/8の日米海戦以降、ミッドウェイ、ガダルカナル、ソロモン、マリアナとすべての過酷な海戦を生き抜いたばかりでなく、連合艦隊最後の作戦たる「天一号作戦」(＝沖縄への特攻作戦)からも生還した駆逐艦だから、その幸運はまさに奇跡だ。そんな本作を、私は9/29に公開される『沈黙の艦隊 北極海大作戦』と共に期待して待っていたが、遂に8/23これを鑑賞！

■□■日本の8/15は戦後80年！ロシアは？中国は？■□■

2022年2/20のウクライナ戦争開始から3年余を経過した2025年5/9、ロシアは第二次世界大戦の対ドイツ戦勝80年を記念し、モスクワで大規模軍事パレードを実施した。また、2025年に入って中国と共催し「反ファシズム戦争」の歴史を振り返る展示会も開いた。

他方、中国は2025年9/3に「抗日戦争勝利」と銘打って北京で記念行事と大規模軍事パレードを開催予定で、ロシアのプーチン大統領も参加する見通しだ。さらに、満州事変の発端となった柳条湖事件が起きた9/18には、細菌兵器開発に従事したとされる旧日本軍の「731部隊」をテーマとした映画が公開される予定。さらに「南京事件」を扱った『南京写真館』も大ヒット中だ。

しかして、8/24付産経新聞は、「Sankei Wideーオピニオンー論点直言」で「中露 戦後80年で『プロパガンダ』強化」を掲載したが、日本の戦後80年は？

■□■本作のテーマは？「8.15シリーズ」の製作意図は？■□■

東宝が企画した1960年代後半の「8.15シリーズ」の製作意図は何だったの？それは言

われなくても私の胸の中にはつきり刻まれているが、戦後 80 年の 2025 年 8/15 に公開された本作製作の意図は？

それはチラシに躍っている「多くの仲間を救い続けた、『雪風』の史実に基づく物語。」、「たった 80 年前、海は戦場でした。」の見出しを読めば推察することができる上、チラシには関口高史氏（軍事研究家）の「“海の何でも屋” 駆逐艦『雪風』と乗員たち。」と題する長文の解説が載っている。これは極めて異例なことなので、あえてその全文を転載すれば次のとおりだ。

本作品は駆逐艦「雪風」に焦点を当て、史実に基づいて作られた戦争映画である。駆逐艦とは一言で言うと、「海の何でも屋」だ。駆逐艦は戦艦や空母などと比べ、小型で軽量、派手さもない。しかし、その分、艦に乗る人の人間臭さが滲み出る。時に魚雷艇などで勇ましい戦い振りを見せたかと思えば、自らの身を危険にさらしてまでも輸送護衛に徹し、沈没した軍艦の乗員を救助する自己犠牲の精神を見せる。

では、艦の精否は何を見ればわかるか。それは艦の大きさや積んでいる武器の性能諸元だけではない。艦長と先任伍長の関係性を見れば一目瞭然である。艦長は職父と譬えられるように、艦全体のことに意識を集中する。それに対し、先任伍長は甚厚あるいは頼れる兄貴として、個々の乗員を掌握し、艦の細かいところまで目を配る。この二つの心眼、阿吽の呼吸があってこそ、乗員は心をつなげて安心して戦えるのである。本作品でもそんな二人のやりとりから目を離さない。

また戦場ではみんな裸にされる。普段、どんなに威勢の良いことを言っている、「合戦準備！」の号令がかかれば、一人の人間になる。恐怖の中、自らの活動源になるのは

「配置」である。艦隊、艦、部署、そして個人に与えられた役割であり、仲間を信じ思いやる真心にもつながる。やがて個人の思いやりは部署に、艦に、艦隊へと伝播していく。それは一日や一週間、あるいは一ヶ月などでできるものではない。何年もかけて徐々に醸成されていくのである。本作品でも若者の視点から、その過程がリアルに描かれ、他の戦争映画と一線を画している。

そのような「雪風」だったからこそ、実際に「不沈艦」と言われ、絶望の戦場に希望を与え、冷酷な戦いを温もりに変え、多くの乗員を死ではなく生きて還らすことができたと信じる。なお「雪風」は戦後、復員輸送船となり祖国へ帰還する人々に生きる勇気を与え続けた。そして最後は賠償艦として自らの役割を終えた。まるで凝縮された人生を見るようだ。

本作品では、それらの熱いメッセージが随所にちりばめられている。戦争を決して美化するのではない。戦争を絶対に起こしてはならない。ただ駆逐艦「雪風」という艦があったことを、そして誰かのために必死に生きた人間がいたことを知ってほしい。そこに今を懸命に生きる意味も見えてくるはずだ。

私はこの解説に異を唱えるつもりはないものの、あの過酷な戦争の多くの海戦に参加しながら最後まで生き延びた駆逐艦「雪風」の物語を描くについて、そんなテーマでいいの？ そんな疑問を禁じ得ないが・・・。

■□■「戦うこと。それは、生きること。」にも異論あり！■□■

また、チラシには「多くの仲間を救い続けた、『雪風』の史実に基づく物語。」の見出しを補強するべく（？）「戦うこと。それは、生きること。」と題する次のイントロダクショ

ンが載っている。すなわち、

たった80年前。平和な海が戦場だった時代。数々の激戦において最前線で戦い続けた駆逐艦「雪風」は、他の艦が大破喪失していく中で、奇跡のような不死身ぶりを発揮した。主力として海戦に送り込まれた甲型駆逐艦38隻のうち、ほぼ無傷で終戦を迎えたのは「雪風」ただ一艦のみ。やがて“幸運艦”とも呼ばれた「雪風」は、どんなに激しい海戦においても、最後は海に投げ出された兵士たちを、時には敵味方関係なく救い続け、帰国した。乗員が、行きよりも帰りの方が多い、というのは「雪風」らしい逸話である。戦後は「復員輸送船」としての航路を続け、外地に取り残された人々、約13,000名を日本に送り返した。映画「雪風 YUKIKAZE」はその知られざる史実を背景に、太平洋戦争の渦中から戦後、さらに現代へと繋がる激動の時代を懸命に生き抜いた人々の姿を、壮大なスケールで描き出す。この夏、全世代に贈る、最大級の感動大作が誕生する。

たしかに、駆逐艦「雪風」はどんなに激しい海戦においても、最後は海に投げ出された兵士たちを救い続けた後に帰国したのだろう。しかし、私に言わせれば、それは戦争（海戦）の一部に過ぎず、戦争の本質はあくまで軍艦の沈め合い、兵士の殺し合いだ。駆逐艦は図体が小さく速力が早いから、寺澤一利艦長（竹野内豊）が言う通り“小回りが効く”。そのため対空戦が始まる中、寺澤艦長のように、三角定規を目に当てながら適切な操艦指示をすれば、爆弾や魚雷を回避する可能性が高く、艦が生き延びる可能性が高くなるのは事実だが、それはあくまで結果論だ。どてっ腹に魚雷を一発くらえば、駆逐艦などひとたまりもないことは明白だ。

真珠湾攻撃を開始した1941年当時、米国海軍にそれほど引けを取らなかった日本の連合艦隊は、「天一号作戦」を実施した1945年5/7には「戦艦大和」の他、「雪風」などわずかの護衛艦になってしまった上、その艦上を守る航空戦力はほとんどゼロになっていたのが現実だ。したがって、海戦の度に「雪風」が多くの兵士たちを救ってきたことをどう評価するかは難しい。もちろん私はそれが無価値だったと言うつもりはないが、さりとて「戦うこと。それは、生きること。」と言い切るのは如何なもの？それは違うのでは！！

■キネマ旬報9月号に見る本作の評価は？■

私は定期的に購読しているキネマ旬報の中の「REVIEW」を毎回楽しみに読んでいる。しかして、キネマ旬報9月号の本作についての評価は興味深い。まず、「しかし負け戦を描いてこれは出色の出来。沈没する戦艦から何人救出できるかという話だからね。」「ともあれ艦長の竹野内豊が目視と三角定規の角度で敵機銃掃射から身を（艦を）護るディテールが拔群。」等、最も無難な書き方（誉め方？）をしている映画評論家・上島春彦氏は、星3つと採点も普通だ。

私が意外だったのは、評価の厳しさで定評のある(?)映画評論家・北川れい子氏が、「さすがに戦争を美化するような場面はないが、雪風の乗組員たちの描き方が、海を知り戦術に長けた艦長、無口だが情に熱い先任伍長、率直で忠実な兵たちと実にまとまりが良く、いや良すぎるほど。」といつも通り皮肉っぽい批評ながら高評価であること。北川れい子の誉め方異例なら、星3つの評点にもビックリ!

それに対して、私が「ほぼその通り!」と同感したのは、文筆家/俳優の睡蓮みどり氏が、「戦闘シーンはあるものの重きを置かれるのは隊員たちの勇姿で戦争の陰惨さではない。戦後80年を意識して作られるならなおさら、戦争が残したものを伝えるべきでは? 史実に基づいた話とはいえ、『戦争を通して感動させよう』という意図が透けてみえる。」との手厳しい批評だ。「本作はプロパガンダであることは否定できないのではないだろうか。」の意味は不明だが、星1つの低評価と共に、よくぞここまでハッキリ批評したものだと感じ!

■制作委員会方式の弊害① いい人ばかり! ■

近時の邦画は制作委員会方式が目立つが、同方式は参加団体全ての最大公約数の要求を入れ込むため、散漫になってしまう傾向が強い。本作もそんな制作委員会方式の弊害が顕著だ。その第1は何よりも登場人物がいい人ばかりだということ。本作の主人公の1人はストーリーの前半を牽引する先任伍長の早瀬幸平(玉木宏)だが、早瀬は現場のリーダーとして、「こんな頼れる先輩がいたらいいナ」と思う要素をすべて満たした理想的な人物だから、それに注目! もっとも、そのキャラだけでは「雪風」のストーリー全体は持たないから(?)、彼の最後(戦死)はあまりにもあっけないものになっている。こんな死に方(殺し方?)あり?

他方、本作全体の主人公になるのは艦長の寺澤だが、こちらも艦長として非の打ちどころのない理想的なキャラだから、逆にそう描かれるとどうしてもウソっぽくなってしまいリアルさがないところが大問題だ。海戦や航空戦における超人的な操艦も、戦闘終了後の海に投げ出された兵士たちの救出も、結果的に大成功だったのは良かったが、一步間違えばアウトだったことは明白だから、コトの是非の判断は難しい。寺澤が「武士道」を心の糧にしているのも立派だが、ゴムボートに乗った米兵への攻撃を中止させた上、敬礼までの寺澤の姿、そしてそれを「武士道だよ」と周りの兵士たちに説明する部下の姿を見ると、私の心の中には「こんな姿、ありえない!」の叫び声!

■制作委員会方式の弊害② 何度も登場する写真は? ■

軍人として出征していくときに1枚の写真を持っていくとしたら、誰のどんな写真を? それは、妻子のある男であれば妻子の写真、10代の兵士なら両親(母親)の写真、恋人ができたばかりの男ならその恋人の写真。相場はそう決まっている。すると、「雪風」の艦長として、孤高の任務を全うしている男・寺澤が肌身離さず持っている写真は当然妻・志津(田中麗奈)と幼い娘が写ったもの! 誰でもそう思うはずだが、本作はそうではなく、それは彼の海軍兵学校時代の同期の友人4人が写っている写真だから、アレレ、アレレ……。

戦争が進んでいけば戦死者が増えるのは当たり前。したがって、江田島で共に同じ教育を受けた海軍兵学校時代の同期生が1人また1人と死んでいくのは仕方ない。しかし、寺澤の兵学校時代の同期生は何人？同じクラス生は何人？そんな中、なぜクラス全員の集合写真ではなく、4人で写った写真を？それは、そこに一緒に写っている3人がよほどの親友だったためだろうが、本作ではその3人が順次戦死しているらしい。それは確率論的にはかなり厳しい現実が、それはこの3人がよほど過酷な最前線の任務で戦ったということだろう。ちなみに私は1974年に弁護士登録をした第26期司法修習生として約500名の同期生がいるが、51年間の弁護士生活を経た今、その生存者は約半数。半数は鬼籍に入ってしまったが、それは仕方ない。

しかして、本作では寺澤が凛々しい軍服姿で撮影した4人の写真を再三持ち出し、自分の思いをその写真に込めているが、私にはイマイチその気持ちがわからない。寺澤はなぜ妻以上にこの3人の同期生に思いを馳せているの？その説得力がないのも、本作が製作委員会方式で作られたためだと言わざるを得ない。その他、私には本作はあまりにも情緒面、人情面を強調した感が強すぎると思ってしまったが・・・。

■□■海軍上層部の描き方は？中井貴一のカッコ良さに注目！■□■

東宝の「8.15シリーズ」では、第1作が阿南惟幾、第2作は山本五十六、第3作は東郷平八郎に焦点を当てていたが、太平洋戦争における日本の「連合艦隊」の戦い方全般については、松林宗恵監督の『連合艦隊』（81年）が極めて要領よく描いている。同作で江田島の海軍兵学校を主席で卒業した小田切正人少尉役を演じていたのが、同作でデビューした中井貴一。佐田啓二を父親に持つ彼は、その後、邦画界の貴重な“二枚目”として成長し、『梟の城』（99年）、『壬生義士伝』（03年）、『雲霧仁左衛門』（13年）等で大活躍。中国映画『ヘブン・アンド・アース 天地英雄』（03年）（『シネマ5』152頁）では中国進出も果たしている上、近時は喜劇役者としての器用さも発揮しているから、さすがだ。

そんな中井貴一が本作では天一号作戦を担う第二艦隊の司令長官伊藤誠一役を演じているので、可能ならば『連合艦隊』における海軍少尉役と対比して、それに注目！戦艦大和の操艦は艦長たる有賀幸作（田中美央）の役割だが、天一号作戦に基づきどこまで海上特攻作戦を進めるのか、逆に言えば戦艦大和の損傷具合を確認しながら、どこで作戦を中止し「総員退去」を命ずるのかは伊藤司令長官の腹一つで決まるわけだ。

本作後半は、そんな日本海軍上層部の思惑（混乱ぶり）がしっかり描かれるので、それに注目！「海上特攻だから片道の燃料しか積み込めない」との作戦に伊藤は当初は断固反対したが、要するに「死んでくれ！」という命令だと理解した途端にたどり着いた結論とは？そんなこんな男の（軍人の）決断を見せる中井貴一の演技はさすが！あの口の悪い映画評論家（？）・北川れい子氏もキネマ旬報9月号の「REVIEW」では、「出番は少ないが、中井貴一の演技には背筋がピン」と褒めているので、本作ではそのかっこいい姿をしっかりと！

2025（令和7）年8月27日記